

ダ・ヴィンチの思い出と「聖アンナと聖母子」： フロイトによる精神分析伝記の再評価

鈴木繁夫

Freud's psychoanalytic interpretation of Leonardo's early childhood recollection and his painting *Virgin and Child with St. Anne* suggests that the Renaissance genius was a probably homosexual, when viewed in light of his confusion about his sexual identity and his identification with the mother figures in the painting. Freud's reconstruction has suffered considerably from criticism by art historians who have disproved a great deal of his evidence and cast doubts on his hypothesis. We review Freud's statements concerning Leonardo's knowledge of emblematic imagery of vultures and Pfister's discovery of a hidden vulture figure within the painting. Despite inaccuracies and inadequacies in Freud's monograph, his psychobiographical explanations would turn out to serve postmodern pleasure-seeking in the artist's works when more extra historical facts to support his narrative are in.

1. 精神分析伝記の誕生と隠蔽・検閲

フロイトが、『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思い出』を発表したのは1910年であった。⁽¹⁾ この小論は一世紀を経た現在でも、この異能の芸術家を論じるにあたっての必読文献になっている。フロイトの議論の前提には、隠蔽記憶という機制が人間には働いているという見方がある。⁽²⁾ 隠蔽記憶の「記憶」とは、幼児期に起こったある出来事が映像のように鮮明に残っているが、その出来事は内容からするととても些細でありながら何度も執拗に浮かび上がることを特徴とする記憶のことである。これに対して、「隠蔽」される内容

は、自分では隠していたい抑圧されている、性的経験や実際に起ったはずの出来事などである。フロイトは、レオナルドが幼児期の思い出として残している述懐をこの隠蔽記憶とみなして、この芸術家が同性愛者であったことを導き出した。

また、この論でのもう一つの前提は、検閲という機能の働きがあることだ。検閲とは、夢が伝えているメッセージを分析するにあたってフロイトが考え出した心的機能である。検閲の機能によって抑圧された欲望や感情は、圧縮・転位・象徴といった偽装のもとに意識に顕在化すると、フロイトは考えついた。検閲は表層では、欲動や感情を直接に表現できず置き換えて表現させる機制だが、検閲機能の本質はそこにはない。検閲が実は働いていても、検閲は、検閲されているという事実そのものが本人には知られないように機能している。本人には検閲がまったくないと思っていながら実は検閲が働いている、この盲点化こそが検閲機能の特質である。⁽³⁾「良心が語っているとき、それは我々のなかで社会が語っているのである」と社会的拘束を説明したのは、フロイトの同時代人デュルケムだ。⁽⁴⁾これをフロイト流に言い換えれば、「意識が語っているとき、それは我々のなかで検閲機能が働き、検閲済みの感情や思いが語っているのである」といってもよい。この検閲機能に対する畏れと敏感さがフロイトに強烈にあったからであろう、フロイトは心的メカニズムのモデル、機能、働きなどを仮説として次々と発表していくが、実質的な修正をたえず加えており、「フロイトは本当は何を言っていたのか」と書名になるほど、仮説を生涯にわたってたえず差異化していつている。⁽⁵⁾それは「真理の正しい再現」、「事実」に即した証拠」といったものが、本質的な意味での検閲をへて言語化されたものであり、歪められた言語空間のなかでの産物だということをフロイトは強烈に感じ取り知っていたからだろう。⁽⁶⁾そして事実——こう書くこと自体も検閲機制がすでに働いている——フロイトは、レオナルド論が「精神分析小説」(96)だという批判を受けるとしても、この論のなかで導き出された「数々の結論が確定した事実などとけっして過大評価していない」(96-97)と公言している。

(7)

フロイトのレオナルド論が重要文献となっているにもかかわらず、「感情的な抵抗と熱烈な魅了」といったように、その評価は両極端に割れている。⁽⁸⁾その理由のひとつは、この論の手法が私達一人ひとりが抱えている個々の隠蔽記憶をどこかで呼び覚まし、その呼び覚ましには検閲機能が絡んでいるからではな

いだろうか。そしてこの論の是非、成否、正誤を論じようとする、そこに不可視の検閲機能がいつもすでにつきまとい、真理や事実というものがある表象・再現前化しているのかどうかという批評の根本的なあり方に、自覚するかしらないは別にして、疑問を持たせるからだろう。(9)

ところが、そうしたモダンの状況下での両極の評価から離陸することが、21世紀の「動物化」したポストモダンの状況では可能になってきた。(10) 現下では「大きな物語」への信頼が大きく揺らいでいるが、それは検閲が機能する制度そのものの正当性が疑われることであり、隠蔽記憶などの固有のロジックやそこから展開して見える事象への普遍的価値づけにはさしてこだわる必要がなくなってきた。むしろ事象そのものの細かな断片に注目し、その断片を大きな物語の脈絡に有機的に関連づけず、事象の断片そのものを楽しむことが許されるようになってきた。この社会では芸術作品は、新たな認知を提供する方向に作品享受者（＝消費者）を誘う題材であり、享受者にはその認知を介して自分にとっての楽しみを開拓していくネタなのだ。(11)

本稿の目的は、レオナルドの幼児期の思い出のなかの「禿鷲」に焦点をあてて、フロイトの小論の重みと戯れつつ、論の価値を再考することである。しかし遊戯をするにも共通理解が必要なので、彼の理論に触れながら小論を簡単にまとめることから始めることにしよう。

2. 禿鷲と幼児体験

鳥が空を飛ぶスケッチの余白に、レオナルドはなぜ自分が鳥の飛翔に興味をもったのか、その理由を鏡文字で書いている。

「禿鷲にこれほどまで深く関心があるのは、私にいつもつきまとう運命のように思われる。というのは、とても幼かった時期に、私が揺り籠の中にいたところ、一羽の鷲が私のところに舞い降りてきて、その尾で私の口を開かせ、尾で唇の上を何度も打った、という夢を一度見たことを覚えているからだ。」(32)

これは、レオナルドが手記のなかで幼年期について書いた唯一のものである。

幼児期の体験が、大人になってからの人格に、意識下で深く影響をおよぼす

という独自の理論をもっていたフロイトは、この箇所注目した。幼児期の体験のうちその多くは、意識という場において抑圧され、思い出すことがむづかしくなっている（隠蔽記憶）。また幼児は天真爛漫なのではなく実は性欲があることを暴き出したフロイトは、幼児性欲が両親との関係において段階をへていきながら、その人の人格のなかで昇華されるパターンを示した（オディプス・コンプレックスと性器統裁）。^{ジ' エニタル・ア・ライマシー}（12）このレオナルドの幻想について、フロイトは隠蔽、幼児性欲、母子関係という基本線にそって説明していく。

まず、禿鷲の「尾」は男根を代理する象徴であり、その尾で「口を開かせ」、「何度も打った」のは、男根を相手の口のなかにさしこむ性行為（フェラチオ）の観念をあらわしている（36-37）。男根は男性であるレオナルドのものであるはずなのに、ここではレオナルドが相手の男根を口に入れていて、受動的な性行為になっている。こういうタイプの幻想は、女性か女性役の同性愛者がいづく幻想である（37）。もっとも受動的な性行為の観念から即座にレオナルドが性的倒錯者だとは断定できない。この幻想が隠しているのは実は誰もが経験していること、つまり乳房をしゃぶり乳を飲む赤ん坊の行為と考えることもできるからだ（38）。しゃぶることは、可能性としては誰もが抱きうる幻想である。

しかし授乳の思い出にすぎないなら、なぜ母親が鳥の姿であらわれているのだろうか。そこでフロイトが言及するのは、エジプト神話である（39）。フロイト自身、エジプト神話に大変に魅了されており、ここではヘルメス・トリスメギストスの名前とホラポッローの『聖蹟図像文字』の書名をあげている（40）。書名だけあげて、その記述内容を簡潔に説明しているだけだが、フロイトが参照したと思われるホラポッローのラテン語対訳版では次のように記載されている。

禿鷲の図像が表しているもの

エジプトでは母親をあらわす。なぜかといえば、禿鷲に雄はいないからである。ではどうやって生まれるのか。禿鷲は生みたくなると、性器を北風に向け、そのまま5日間さらしつづける。この期間、禿鷲はいつさいに飲まず食わずで、ひたすら子供を産むことを考える。⁽¹³⁾

このエジプト神話の禿鷲の話は、母親が父なしで自分を生んでくれたこと、つまり、レオナルドの幼年時代に即しているなら、父親なしに育てられ、母と二

人暮らしであったという伝記的事実と重なり合う(43)。

レオナルドは私生児であった。父親セル・ピエロは公証人の家系でそれなりに裕福であったが、母親カテリーナは貧農の娘であった。レオナルドが生まれた年にセル・ピエロは血筋のよい女性アルビエラと結婚している。カテリーナはピエロに捨てられ、夫なしにレオナルドとともに暮すことを強いられた。レオナルドは人格形成にとって重大な時期を、母親との二人暮らしという正常さを欠いた状況のなかですごしたのだ(43)。ところが新妻と父セル・ピエロの間に子供ができなかったために、5歳の時にレオナルドは父の家にひきとられる。両親のそろったいわば正常な家庭で育てられることになる。⁽¹⁴⁾

ここまで伝記事実を準備したうえで、フロイトは、レオナルドに固有の幼児体験が母親＝禿鷲といったどういう関係にあるかを、「小児期の性探求」(45)に関連づける。「小児期の性探求」とは、「赤ん坊はどこからくるのか、父親は赤ん坊が生まれることとどう関係しているのか」を幼児が探ることである(44)。⁽¹⁵⁾ 片親体験を味わうレオナルドは、そんな疑問を他の子供よりも強烈に抱き、無意識のなかでメスしかない禿鷲の記述に共鳴したのだ。「禿鷲について克明に書き記すことは、私に定められた運命」であるという表現も、けっして大げさなものではなく、レオナルドが自分の内的叫びに忠実であったことの証ともいえる。

3. 両性具有と同性愛

しかしここでわからないのは、禿鷲の尾によって象徴されている、もっとも男性らしさをあらわすペニスを、なぜ女性でしかありえない単性生殖の禿鷲がもっているのかである。

エジプト神話では、禿鷲の頭をしているのはムート女神だ(47)。この女神はその胸のふくらみからみれば明らかに女性なのだが、同時に勃起した男根をもっている。両性具有は私たちの常識からすれば不思議な存在だが、エジプト神話には両性具有神はこの神のほかにもいるし、またギリシア神話にも同じく何柱かの両性具有神がいる。フロイトはもちろんのこと、20世紀初頭の世界精神分析者の間では、人間の本質的なあり方として、人間は基本的に両性具有であることを大前提として議論が組み立てられることがあった。⁽¹⁶⁾ そして小児性欲理論の立場からすれば、幼児は自分の起源を探求するから性器への関心が高まり

ながらも、自分の性器と違ったタイプの性器があることを思いつかない。そこで男の子は母親にも当然、男根があるものと想像してしまう。ムート両性具有神も、男根と陰部とが合体しているわけではなく、女性の体に付属して男根がつくような形になっている。レオナルドの禿鷲幻想は、幼児の好奇心が母親にむかい、そのとき母には自分と同じ性器があると思っていたという、幼児が一般に経験するメッセージを伝えていることになる。

禿鷲＝母親、尾＝男根、男根のある母親像ということはこれでわかったが、「尾で私の口を開かせ…打った」という極端なまでの受け身性は、どう説明したらよいのだろうか。同性愛者は赤ん坊の時期に、性愛において男性にではなく、女性、それも母親に強度に傾倒する(54)。同性愛者の場合、なんらかの理由で父親が不在で、赤ん坊は母親の影響下にしかさらされず、そのために母親への極端な傾倒がおこる。この傾倒は、幼児期になると検閲によって抑圧されてしまい、子供は母親への愛を抑圧するその代理として、自分を母親の立場に置きかえる。母親と自分とを同一視し、幼児である自分をモデルとした別な愛する対象を選択する。

レオナルドは生涯結婚せず、自分と行動をとともにする弟子がどれも美男子であったといわれている。それはレオナルドが過去の自分の姿（必ずしも忠実な反映でなくとも自分でそうだと思えばよい）を復活させていたからだし、弟子たちをかわいがったのは、レオナルドが赤ん坊だったときに母カテリーナに自分がしてもらった（あるいはしてもらったと思っている）とおりにしているのだ。さらにいえば、同性愛者の場合、母親への性愛的傾倒が抑圧され意識にのぼってこないために、母のみに忠実な息子でありつづけようとする。自分が自分の母以外の女を愛すれば母親への愛を失うかもしれない恐れがあるから、少年の後を追いまわし愛することになる。同性愛とは自分の母以外の女から逃げまわる行為なのだ(55)。レオナルドは、母への愛を守るために、同性愛者となった。そういえばレオナルドが最初に働いたヴェロキオの工房では、同性愛の嫌疑をかけられてレオナルドはやめさせられているし、彼が住んでいたフィレンツェでも同様の投書をされて裁判にかけられた。(17)

同性愛における母親への配慮は少年愛だけにとどまらない。同性愛へと向かうのは単なる外面的な行為の類似だけではなく、原型としてある母子関係をいつまでも無限に反復していこうとする(55)。レオナルドの場合には弟子はいつまでも子供のままでいるのがよいのであって、弟子から自分に匹敵するような

大人の芸術家を育てることはむしろ御法度なのだ。事実、レオナルドには芸術家としての弟子はいなかった。

4. 口唇と微笑



図 1 「聖アンナと聖母子」
1503 年頃 （ルーブル美術館）

しかしこれで幼時レオナルドの思い出を語りつくしたことはない。

「その尾で私の口を開かせ、尾で唇の上を何度も打った」という記述から、母親の行為（尾で打つ）が口唇部位にかたよっていることがわかる。これは次のように翻訳できるのだ。「私の母は私の口に熱烈に数限りなくキスを押しつけた」、つまり母カテリーナは乳を飲ませるだけではなく、ディープ・キスを何度も何度も乳児レオナルドにしたのだ(64)。

ところで芸術家というのは、一般の人とは異なって、心理的に抑圧して自分でも気づかない心の秘密を、作品という形で外在化してしまう。⁽¹⁸⁾ 秘密を内にふくんでいる作品は鑑賞者に強力な影響力をもつが、鑑賞者のほうはその作品にどう

して特別な感情をいだいてしまうのか、説明をつけられない(67)。

レオナルドという名前を聞いて誰もが思いだすが、魅惑的でなおかつ不可解な「モナ・リザ」の微笑であろう。この微笑は、女性のエロスのな生命を支配している遠慮と誘惑、言い換えるなら、このうえなく深い愛のやさしさとぐいぐいと迫ってくる官能性とは共存しているといってもよい。「モナ・リザ」は肖像画だから、モデルが微笑していたと単純に考えがちだが、レオナルド自身がモデルその人のなかにこの微笑を見つけだし、微笑の呪縛にとりつかれたと考えることも可能である(67)。そこでフロイトは、神秘の微笑に取り憑いているのは母親であり、「モナ・リザ」のモデルのなかにレオナルドは幼児期にみた、今は取り戻すことのできない魅惑的な、実母のほほえみをみてしまったと推測

する(69)。

この微笑は「聖アンナと聖母子」(図1)の、マリアとその母であるアンナにおいても繰り返されているが、これは当然といえばあまりにも当然である。アンナはマリアとペアになって母性を代表しているから、アンナの口元に微笑が浮かんでいることで、母性が栄光化されるし、その一方で、マリアにやどる微笑は自分の母親がマリアのように高貴な女性であったことに重ねあわされている(71)。

もっともこの絵が物語っているのは母性の栄化と母の高貴さだけではない。アンナはマリアと幼子キリストを祝福しながら見守り、マリアは両手をキリストに差しだし守っているが、これはレオナルドの幼児期の家族体験とうまく合致している。レオナルドが住んだ父の家には、若き母アルビエラと祖母ルチアがいた。二人はレオナルドにやさしくしてくれた女性であったのだろう。幼子イエスを見守る二人の女性は、幼子レオナルドを見守る継母と祖母と重なる。しかしアンナはマリアとくらべてみても、それほど老けてはおらず、輝くような美しさを備えている。この二人の聖女がそれほどの年齢差もないまま、ともに美しく描かれていることは、この二人が祖母と継母の「統合」だけではなく実母と継母とが投影されているからなのだ(71-72)。リアリズムの原則にそってアンナが若すぎるというのは、レオナルドの幻想を有効に解釈しない指摘だといわざるをえない。⁽¹⁹⁾ この絵は、祖母と継母、実母と継母という二組のペアを、ちょうど夢のなかの像が現実の複数のあり方を圧縮しているように、合成しているのだ。その証拠に、アンナの体からマリアの体を分離してみようとしても、どこまでがアンナでどこからがマリアなのかをはっきりといえない(72-73)。これは、リアリズムの原則にしたがえば失敗ということになるが、それはあまりにも皮相的な裁定といえるだろう。

私たちがふつうこの作品はリアルだというときには、生活世界はこのように構成され、こう見えるはずだとされる知覚理解の枠にそって、芸術作品のなかでそのように再現されていることをいう。絵画における線遠近法による表現、小説における自然主義や写実主義は、みなリアルな再現の例である。レオナルドが称賛されるのも、鳥の飛翔の描写が細かく精確になされているからリアルだといわれる。ところが「聖アンナと聖母子」のリアルさは、その種のリアルを、三人の姿勢といい年齢といい、あまりもちあわせていない。そこに漂っているのは、私たちの心の深層のどこかに共鳴し、実感としてそうだろうと感じ

させるリアルさなのだ。フロイトの指摘は広義の「心的リアル」であって、生活世界で実際にどうあるかというハードなリアルの直截の再現化というよりも、過去の体験が解体分離されて本人には無自覚のうちに新しい心象に再構成されてできあがる幻想ということなのだ。(20)

こう説明されると、微笑がなぜあれほど魅惑的なのがわかるが、それならなぜ薄気味悪さが漂っているのだろうか。アンナはマリアをはさんと、マリアよりもイエスから遠ざかっているが、その距離は、レオナルドと共に生活することが許されなかった実母カテリーナの境遇をあらわしている。実母は、レオナルドを継母にいわば盗られるが、実母の投影であるアンナがそれでも微笑をたたえている。この微笑は、息子とともに暮らせないばかりか、「夫」（間男）とも別れなくてはならない不幸な女としてカテリーナが、身分の高い恵まれた女性に嫉妬を抱いてはいないことを示すため、あるいはその嫉妬を覆い隠すためなのだ(72)。「かぎりない優しさ」だけでなく、「陰険な威嚇」(76) が微笑に漂っているのは、そういう境遇を、芸術家自身が記憶の片隅にとどめているからなのだ。

遠回りしたが、ここでディープ・キス、つまり「尾で打った」ことの意味がはっきりとしてくる。セル・ピエロに捨てられたカテリーナは、それまでにこの「夫」と楽しんできた愛撫を完全に奪われてしまった。過去の愛撫の記憶とこれからも愛撫されたいという欲求のはけ口を幼児レオナルドに求め、この子を熱烈に愛したのだ。その愛は、いままでの愛撫が奪いとられてしまっていることへの埋めあわせだけではなく、子供をかわいがってくれる父親が不在だということへの補償でもある。こういう熱烈な愛をうけて、レオナルドは男性性の一部を実母に吸いとられてしまったのだ。この強い母性愛は、母親以外の女性からそういう愛撫を受けてはならないという内的禁止となってレオナルドの心のなかに住みついていた(77)。

5. 禿鷲をめぐるホラポッローと謎絵

以上のようなレオナルドの作品にたいするこうしたフロイトの解釈を最初に読むと、そこにはあまりの飛躍と無理な関連づけがあるように思えてしまう。第一、禿鷲に関して、ホラポッローを引用(40) をしているが、レオナルドはこの記述をいったい本当に知っていたのだろうか。禿鷲はメスだけで、母親を象

徴するという記述は、ホラポッローの専売ではなく、古典古代のいくつかの博物誌にも書かれており、また初代教父時代において禿鷲の逸話は、聖母の処女懐胎を証明するための引き合いにだされていた。フロイトが推測しているように、博物誌からこの話を知ったとか、あるいは初代教父の文書を読んでいて、潜在意識のなかにそれが残っていて夢のなかで関連づけが起こったのといったことは、一読しただけではやや考えにくい⁽⁴⁰⁾。ホラポッローを直接知らなくても、禿鷲にかんする知識を持ちえたという指摘には、現代のレオナルド研究者もやや辟易気味で、「15 世紀のイタリアでこの話が流布していたとか、レオナルドがこの話を知っていたという証拠は残っていない」といつている。⁽²¹⁾ なるほど初代教父にせよホラポッローにせよ、1000 年以上も前の文献なのだから、いぶかしく思うことももつともである。

しかしホラポッローの写本は、レオナルドが思春期をすごしたフィレンツェに現存しており、しかもレオナルドが手記にこの幻想を記述した 1505 年は、当時発達した印刷術のおかげで、ホラポッローが写本の形ではなく、印刷本として出版された年でもある。⁽²²⁾ この本は『イソップ寓話集』と合本で刊行されたことからわかるように、売れる本、読みたくなる本であり、いわば文化人必読文献として評価されていたのだ。この年はまたレオナルドが 18 年仕えたミラノ宮廷を去って、再び人文主義のフィレンツェに戻ってきていた。とするならラテン語はさほど読めなかったはずのレオナルドが、直接にこの本を手にしたかどうかは別にして、この本の内容について、当時のフィレンツェ人文主義者などから聞いていた可能性は十分にある。

この本の前書きによると、この奇書は、ニロポリスのホラポッローがエジプト語で書いたもののギリシア語訳である。2 巻からなり、前巻が 70 章、後巻が 119 章で、各章でエジプト聖刻文字がどのような意味に対応しているかを、寓意を媒介にして説明している。説明されている文字は、実際のエジプト聖刻文字とそれほど密接な対応関係にない。⁽²³⁾ ところがこの本は、イタリアを中心とした当時の写本発見熱とあいまって、古代の隠された神秘を探しあてるための一大発見としてまつりあげられる。

中世から 15 世紀に至るまでの西欧では、世界にあふれるものごとやこの世で起こるあらゆる出来事についての意味づけも、そしてその意味づけをする包括的な価値観も、カトリック教会の教理とそこから導き出されるキリスト教倫理の傘下にあった。そうした教理や倫理に対して、ギリシア・ローマの古典文

化を発掘していった 14・15 世紀の人文主義者たちは、文献学を駆使して古典文化にみられる歴史的事実を浮かび上がらせ、異教の教理・倫理を次第にあきらかにしていった。それは、人間の欲望・感情を抑圧してきた教会の束縛から人間を解放し、感情の発露を積極的に肯定する道を切り開いたという特徴がある。しかし古典文化の蘇りを目指したこの時代は、カトリックの教理・倫理を覆す宗教改革が 16 世紀初頭まで待たなくてはならなかったことからわかるように、古典文化に寓意的解釈（つまり、圧縮・転位・象徴）をほどこし、従来の教理・倫理を補強する方向で古典文化を吸収していった。

これをフロイト流に言えば、人文主義の洗礼を受けた人々は、写本という断片的な記憶が残っていることに気づき、それを発掘し、文化の揺籃期にあたる古典時代の精神を再現しようとするが、その再現は寓意を介してカトリックの教理・倫理に折衷された別の経験の記憶として置き換えられている。『道徳化されたオウィディウスの変身物語』がその好例だが、一見するとそれは確かに古典のテキストからなり古典文化の賜物なのだが、カトリックの教理・倫理に合うようにテキストの読解がなされ、教会に抵触することなく理解可能で有意義な記憶内容として浮上する。⁽²⁴⁾ ここで寓意解釈を教会への妥協と歪曲と見なせば、そうした解釈は抑圧された衝動が検閲の警戒をごまかして発現するための心の手段といえる。だからこそ、レオナルドや彼の同時代人ボッティチェリによる裸体の女神を主題とした異教的作品は、レダの場合には権力と不正義の合体、ヴィーナスなら春の到来といったように寓意として表面的に解釈することで、女性の裸体美がもたらす快楽は検閲をすり抜ける。⁽²⁵⁾ それはホラボッローの記述内容でも例外でないことは、さきほどの禿鷲についての引用を、検閲が無意識における欲動・感情にすでに働いているという観点から読み直せば自明のことだろう。



図 2 鳥の謎絵

さらにレオナルドとホラボッローをつなぐフロイトの推測をまるで裏づけるかのよう、フロイトの盟友であった心理学者オスカー・プフィスターは、フロイトが禿鷲の指摘をした論文を出した 3 年後の 1913 年に、「聖アンナと聖母子」のなかに、禿鷲の形姿（図 2）が隠されているのを見いだしたのだ。⁽²⁶⁾ 聖母の青いマントの輪郭を

追っていくと、聖母の腰の上のところが禿鷲の頭とすると、聖母の右足は羽、そして聖母の右手で押さえつけられるようにして仰向けになっている禿鷲のシルエットがみえてくる。そして聖母の左手にかかっているマントの襷をしっぽとすると、イエスの口にそのしっぽの一部が入っているようにみえるではないか。つまりレオナルドの夢がこの絵のなかに繰りかえされているのだ。なおこの関連で鳥とペニスとの視覚芸術における結びつきについていえば、その連想は古典にもそしてルネッサンス期にも知られていたことであった。⁽²⁷⁾

プフィスターは、意味のない形を介して性格検査をするロールシャッハに深い影響を与えていることが暗示しているように、夢の分析が不可能な場合には、患者が発する一見意味のない言葉(cryptolalia)や患者が描く理解し難い図絵(cryptography)に注目した。無意識の領域でうごめく情動は、検閲を受け抑圧されているが、こうした言葉や図絵を通じて意識にのぼってくると考え、これらを患者の精神の動きと関連づけて意味のある読解分析にすることを積極的に進めていった。⁽²⁸⁾そして一見すると意味のない言葉、理解し難い図絵に加えて、「無意識の謎絵」(unbewußte Vexierbild)もあると想定した。これは、描き手が意味のある理解できる図絵のなかに、抑圧されている情動を形として無自覚のうちに描きこんでしまう図像のことという。謎絵は、やはり検閲を乗り越えるための無自覚な手段なのであり、プフィスターはフロイトが行ったように、謎絵を通じて幼児期の体験などを掘り起こすことを勧めている。⁽²⁹⁾

この分析家の指摘に関連してしばしば指摘されるのは、じつはレオナルドの夢の記述中の禿鷲は誤訳であったということだ。フロイトがこの論文を書くときに参照したのは、ロシア人作家メレシコフスキイの書いた小説『レオナルド・ダ・ヴィンチ：神々の復活』の独訳と、文化研究者ヘルツフェルドの『レオナルド論』であった(4, 32)。これらの本に例のレオナルドの禿鷲回想が記述されているが、この独訳もヘルツフェルドの解説書も、イタリア語で書かれたレオナルドの思い出のなかでは「トビ」(nibbio)となっているところを、禿鷲と誤訳してしまった。⁽³⁰⁾ここでトビと禿鷲の形体がどう違い、その形体の違いからこのシルエットはトビなのか禿鷲なのかを決定しようとしたり、あるいはトビと禿鷲へのレオナルドの言及を彼の手記のなかに血眼になって探し回ったりといった細かな詮索は不要であろう。なぜならそもそもフロイトは、これがトビなのか禿鷲なのかによって、議論全体が崩れるとは思っていない。「問題になっている大きな鳥が禿鷲である必要はもちろんない」(33)。思い出とし

で記述されている内容が、実際に起ったことなのかそうでないのか、たんなる夢である可能性も否定できず、また実際の経験であったとしても思い出す過程で「深遠な変形」(64)を被っているはずなので、記述されている一つ一つの事柄が「確実にそうであった」(65)とは断定するには一定の限界があるからだ。現段階で明らかになったとされる史実が、フロイトが想定していたように5歳までの母子家庭ではなく、ゼロ歳から継母家庭であったところで、この間になにか強烈な母―子間あるいは継母―子間の体験があれば、それが幼児の口を尾羽で打つ「大きな鳥」という心象となっても不思議ではない。やはり、鳥を有徴な印としてこの思い出を、抑圧と検閲という視点から再評価すると、「母親とのこうしたエロスの関係があったために、私は同性愛者になった」(63)というメッセージと解釈することができるのだ。

こうしてみると、断片から芸術家の内的性質やその作品は説明しうるということになる。そういえばフロイトは、次のような言葉を残している。「単独の症例には、あったらよいと思うような情報がまんべんなく託されているわけではない。いやもっと正確に言えば、少しのことで満足するという未熟な認識に押し流されることなく、なにもかも明るみに出すという立場にさえいるなら、単独の症例はあらゆることを教示しうるのだ」。(31) 同性愛者レオナルドという「単独の症例」には、幼少のレオナルドと家庭環境についての「あったらよいと思うような情報」が欠けている。しかしたったひとつの幼年時代の思い出を手がかりにして、「なにもかも明るみに出す」という臨床的態度を貫けば、個人そして社会レベルでの検閲によって抑圧されていた欲動は「教示しうるのだ」。

ただし、芸術家自身はこのような心理分析についてどう評価しているだろうか。狂気に陥ったゴッホの言葉が参考になるだろう。「ある人とその人の作品との間にはたしかに親近性はあっても、その親近性がどんなものなのか、なかなかきちんと決められないし、その点に関しては間違った決めつけをする人が多い。」(1882年4月14日付)⁽³²⁾ これは、まるで心理小説を読んでいるような感慨に浸らせるフロイトのレオナルド論には、必ずしも全面的な信頼を寄せてはいけないことを警告している。

注

- (1) Sigmund Freud, *Eine Kindheitserinnerung des Leonardo Da Vinci. Schriften Zur Angewandten Seelenkunde* (Wien: F. Deuticke, 1910). 後に二度の改定 (1919 年, 1923 年) を経る。なおこの本は、「応用心理分析叢書」の一冊で、この叢書は精神分析という臨床の場面にのみに特化した狭義の専門書ではなく、文化人類学、神話学などの業績を取り入れて、深層心理分析の考え方を拡張させる方向で執筆されている。Oskar Pfister, *The Psychoanalytic Method*, trans. Charles Rockwell Payne (New York: Moffat, Yard & company, 1917) 11-12.
- (2) Freud, *Screen Memories*, ed. And trans. James Strachey in *the Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* vol. 3 (New York: Norton, 1964) 301-322. 以下、全集は *SE* と略記する。Milton Rosenbaum, "Screen Memory," ed. Edward Erwin, *The Freud Encyclopedia: Theory, Therapy, and Culture* (New York: Routledge, 2002) 514-515; 「隠蔽記憶」 J. ラブランシュ, J.-B. ポンタリス [ほか] 『精神分析用語辞典』村上仁監訳 新井清 [ほか] 訳 (みすず書房, 1977 年) 22-23; 高橋義孝『芸術と精神分析』(人文書院, 1979 年) 190-192.
- (3) Julia Kristeva, "Psychoanalysis and Freedom," *Canadian Journal of Psychoanalysis* 7 (1999): 3-4.
- (4) ジャン＝ポール・シャリエ『無意識と精神分析』岸田秀訳 (せりか書房, 1970 年) 156.
- (5) Susan Sugarman, *What Freud Really Meant: A Chronological Reconstruction of His Theory of the Mind* (Cambridge: Cambridge University Press, 2016); David Stafford-Clark, *What Freud Really Said* (Harmondsworth: Penguin Books, 1967); M・バルマリ『彫像の男: フロイトと父の隠された過ち』岩崎浩訳 (哲学書房, 1988 年) 306-312.
- (6) フーコーの場合には、「デカルト的契機」ではなく「パレーシア」を、あるいは「類似」ではなく「似非」へというになる。相澤伸依「フーコーのパレーシア」東京経済大学人文自然科学論集 130 (2011): 55-69; 鈴木繁夫『フーコーの投機体験: 「これはパイプでない」 探求』(溪水社, 2005 年) 255-258, 374-377.
- (7) Sigmund Freud, *Leonard Da Vinci and a Memory of his Childhood*, ed. James Strachey, trans. Albert Dickson (New York: Norton, 1964). 以下、本書からの引用は本稿ではページのみ記載する。
- (8) Klaus Herding and Nina Schleif, "Freud's Leonardo: A Discussion of Recent Psychoanalytic Theories," *American Imago* 57 (2000): 341.
- (9) Gayatri Chakravorty Spivak, "Translator's Preface," in Jacques Derrida, *Of Grammatology*, trans. Gayatri Chakravorty Spivak (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1976) lxxvii-lxxix.
- (10) Eli Zaretsky, *Political Freud: A History* (New York: Columbia University Press, 2015) 185-96; 東浩紀『動物化するポストモダ: オタクから見た日本社会』(講談社現代新書, 2001 年) 39-142.
- (11) 稲葉振一郎『モダンのクールダウン: 片隅の啓蒙』(NTT 出版, 2006 年) 100-120;

- 見田宗介『現代社会の理論：情報化・消費化社会の現在と未来』（岩波新書，1996年）26-38.
- (12) Henri F. Ellenberger, *Discovery of the Unconsciousness: The History and Evolution of Dynamic* (New York: Basic Books, 1970) 209, 501-510; Melanie Klein, *Contributions to Psycho-Analysis, 1921-1945*, International Psycho-Analytical Library Ser. (London: Hogarth Press, 1948) 387-389; 小此木啓吾『フロイト思想のキーワード』（講談社現代新書，2002）213-233; 上山安敏『フロイトとユング：精神分析運動とヨーロッパ知識社会』（岩波書店，1989年）241-245.
 - (13) Conradus Leemans, ed., *Horapollinis Niloï Hieroglyphica*, by Horapollon (Amstelodami: J. Muller et socios, 1835) 14-15.
 - (14) ただし現在のレオナルド研究では、生まれるとすぐに継母の元にひきとられ、実母はレオナルドが生まれると別な男と結婚していたとするのが定説で、このフロイトの推定は誤りとされている。Martin Kemp and Giuseppe Pallanti, *Mona Lisa: The People and the Painting* (Oxford: Oxford University Press, 2017) 85-91; Walter Isaacson, *Leonardo Da Vinci* (New York: Simon & Schuster, 2017) 34-35.
 - (15) Freud, *The Complete Introductory Lectures on Psychoanalysis* (1917) ed. and trans. James Strachey (London: Allen & Unwin, 1971) 318-319.
 - (16) Ellenberger, *Discovery of the Unconsciousness*, 501-503, 545.
 - (17) Kemp and Pallanti, *Mona Lisa*, 37; Jean-Pierre Isbouts and Christopher Heath Brown, *Young Leonardo: The Evolution of a Revolutionary Artist, 1472-1499* (New York: St. Martin's Press, 2017) 36-39.
 - (18) Freud, *Formulations on the Two Principles of Mental Functioning* (1911) *SE* vol. 12, 224.
 - (19) ただし、美術史家 Schapiro は、聖女は若々しく描くという表象上の決まりがあったから、当然としている。Meyer Schapiro, "Leonardo and Freud: An Art-Historical Study," *Journal of the History of Ideas* 17.2 (1956): 161-164.
 - (20) Freud, *The Interpretation of Dreams* (1901), 3rd ed. (London: Allen & Unwin, 1932) 569; Anthony Elliott, *Social Theory since Freud: Traversing Social Imaginaries* (London: Routledge, 2004) 55-57; cf. Juliet Mitchell, ed., *The Selected Melanie Klein* (New York: Free Press, 1987) 132-134; Slavoj Žižek, *Looking awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture* (Cambridge: MIT Press, 1992) 40-44.
 - (21) 斉藤泰弘『レオナルド・ダ・ヴィンチの謎：天才の素顔』（岩波書店，1987年）72.
 - (22) *Vita & Fabellae Aesopi ... Ori Apollinis Niliaci hieroglyphica* (Venetiis: Aldum me[n]se, 1505).
 - (23) Erik Iversen, *The Myth of Egypt and its Hieroglyphs in European Tradition* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1961), 48.
 - (24) Dan Hooley, "Ovid Translated," ed. J.F. Miller and C.E. Newlands, *A Handbook to the Reception of Ovid* (London: John Wiley & Sons, 2014) 339-54.

- (25) Juan Eduardo Cirlot, *A Dictionary of Symbols* (New York,: Philosophical Library, 1962) 1.
- (26) Pfister Oskar, "Kryptolalie, Kryptographie und Unbewusstes Vexierbild bei Normalen," *Jahrbuch für Psychoanalytische und Psychopathologische Forschungen* 5 (1913): 146-151; Sigmund Freud and Oskar Pfister, *Psychoanalysis and Faith: the Letters of Sigmund Freud and Oskar Pfister* (New York: Basic Books, 1964) 34-35.この往復書簡の中で、フロイトは、レオナルド論が世間から大変な不興を買うことを予測し、プフィスターがこの論のよき理解者であることを期待しているし、またその期待は実際にこの隠し絵の指摘により、裏切られることはなかった。フロイトは、1909年の初版を改定した19年版で、プフィスターの指摘を大きな注として挿入している。
- (27) Clive Hart, *Images of Flight* (Berkeley: the University of California Press, 1988) 120-124, 221-222.
- (28) Pfister, *The Psychoanalytic Method*, trans. Charles Rockwell Payne (New York: Moffat, Yard & company, 1917) 368-376.
- (29) こうした謎絵はレンブラントにもあることが指摘されている。J. Plesch, *Rembrandts within Rembrandts* (London: Simpkin Marchall, 1953).
- (30) この指摘を書籍の中で最初にしたのは、レオナルドの手記の抜粋本を出版したイルマ・リヒター（1952年）で、フロイトの論文発表から40年もたってからである。この誤読を含め、美術史家の立場から、フロイトによるレオナルドの作品解釈が他に多くの誤解釈がありうることを示したのが、Meyer Schapiro (1956) 147-178. この論文への反論は、K. R. Eissler, *Leonardo da Vinci: Psychoanalytic Notes on the Enigma* (New York: International University Press, 1961).
- (31) Freud, *From the History of an Infantile Neurosis* (1914) *SE* vol. 17, 112.
- (32) <http://vangoghletters.org/vg/letters/let217/print.html>